

訳注『出雲名勝摘要』(三)

要 木 純 一

○六道湖

一名ヲ意宇湖、又碧雲湖ト曰フ。意宇、島根、秋鹿、楯縫、出雲ノ五郡ヲ以テ、之レヲ包メリ。長サ五里、幅一里餘、周回ハ一里ニ下ラス。中ニアル一嶼ヲ夜雨岳(嫁島)ト曰フ。老松数幹アリテ、神女ノ廟ヲ建ツ。西ニ屹ツ一峯ヲ石見ノ小媛山トシ、東ニ聳ユル一嶽ヲ伯耆ノ角盤山トス。皇国十二景ノ其一ニシテ、濟勝ノ士ハ四時ヲ別タス、朝ニシテ舟ヲ泛ヘ、暮ニシテ棹ヲ停ム。

【訳】別名を意宇湖、また碧雲湖という。意宇、島根、秋鹿、楯縫、出雲の五つの郡に囲まれている。長さ五里(一九・六キロメートル)、幅一里(三・九キロメートル)あまり、まわりは十一里(四三・二キロメートル)以上である。湖の中にある一つの島を「よあめしま」(嫁が島)という。島の上には、年を経た松が数本植わっていて、神女を祭る社が建っている。湖の西の方にひとりそびえ立っている峯は石見のさひめ山(三瓶山)であり、東の方につきでている岳が角盤山(大山)である。皇国十二景の一つで、名所観光が好きな人々は、春夏秋冬一年中、朝には舟を浮かべて楽しみ、暮れには棹を停めて夕べの景色を味わう。

【注】六道湖―『出雲国風土記』にも載っている、湖南岸の「六道(郷)」にちなんでつけられた名には違いないが、いつ頃から定着したかは不明。『雲陽誌』(元禄頃)・意宇郡・六道・湖「竪六里、横三里の大湖なり。是を六道湖といふ」。江戸時代の古地図に六道湖の名が記載されていることがある。意宇湖―意宇(郡)は、『出雲国風土記』以前から使われていた古名。『風土記』では六道湖、中海をあわせて入り海と呼んでいる。『万葉集』では、意宇郷にちなんで、「お

うのうみ」と呼ぶ。出雲守門部王「飢(おう)の海の河原の乳鳥汝が鳴けば吾が佐保河の念ほゆらくに」。「飢(おう)の海の塩干のかたの片念ひに思ひやゆかむ道の永手を」。これらの歌では、今の中海を指すらしいが、宍道湖も合わせ「意字の湖」と呼んでいたのであろう。碧雲湖―江戸時代の漢詩人、菅茶山がつけたといわれる、宍道湖の雅名。「去」が、「肉」の異体字であることを嫌ったのだろう。意字―以下の五郡は、風土記時代から明治初期まで用いられたもの。意字郡は明治二十二年(一八八九)に松江市(現在の橋南地域)が分立した後、明治二十九年(一八九六)島根郡、秋鹿郡と合併して八束郡に。現松江市南部、安来市等。『島根県百科事典』等参考。島根―島根郡は明治二十二年(一八八九)に松江市(現在の橋北地域)が分立した後、明治二十九年(一八九六)意字郡、秋鹿郡と合併して八束郡に。現松江市北東部。秋鹿―古くは「あきか」とも読まれた。明治二十九年(一八九六)意字郡、島根郡と合併して八束郡に。現松江市北西部。一部出雲市。榑縫―明治二十九年(一八九六)神門郡、出雲郡と合併して簸川郡に。現出雲市平田町周辺。出雲―出雲郡は風土記時代はもちろん、七世紀にも存在したらしいが、中世以前に、一部が神門郡や榑縫郡に組み込まれた。中世は出東郡に変わり、江戸時代は、「出雲郡」の名称が復活したが、「出雲」の表記で、「しゅつとう(出東)」と読まれることもあったらしい。明治以後は「いずもぐん」と呼ばれるようになったであろう。明治二十九年(一八九六)榑縫郡、神門郡と合併して簸川郡に。現出雲市の旧市域、斐川町等。一嶼―嶼は、小島。夜雨嶋(嫁島)―嫁が島。『出雲国風土記』意字郡では、「蚊島(かしま)」。「蚊」が同音の「嫁」と表記され、さらに訓読みして「よめ」になったと思われる。夜雨嶋は他文献に見えず、不審。単なる当て字か。『雲陽誌』(元禄頃)意字郡・乃木・婦島に、干魘の時に雨乞いをする場所となる旨が書かれているので、雨に関する伝承があるのかもしれない。「嫁島」は、ここでは「よめしま」と読むのかもしれない。数幹―幹は、樹木を数える量詞。神女廟―竹生島神社。弁財天を祭る。堀尾吉晴の孫忠晴が一六一一年市杵島姫命を厳島神社から勧請したという。神仏習合で経緯は複雑だが、要するに、宍道湖の女神が祭られているのである。小媛山―三瓶山。『出雲国風土記』国引き神話では、「佐比売山」と表記する。角盤山―大山の別名。『大山寺縁起』等参照。皇国十二景―芭蕉と同時代に日本全国を行脚した俳人、大淀三千風の『日本行脚文集』の序に、「本朝十二景」として、第二田子の浦(駿河)、二

松島（奥州）、三箱崎（筑前）、四橋立（丹後）、五若浦（紀伊）、六鳩湖（近江）、七巖島（安芸）、八蚶象（出羽）、九朝熊（伊勢）、十松江（出雲）、十一明石（播磨）、十二金沢（武蔵）を挙げてゐる。明治になって、本朝を皇国に改めたと思われるが、この記述が『日本行脚文集』に直接拠るのか、何かの本の引用によるのか、また、十二景が、日本三景などと同様、江戸時代に普通に人口に膾炙していたのか、甚だ不審。鉄道院発行『鉄道院線沿道遊覧地案内』（明治四十二年）の宍道湖の項目においても、「松江を本邦十二景の一に数ふる、要するに此湖の勝景によるなり」と記されている。濟勝―本書の序の注で先述。舟ヲ泛べ―曹植・白馬王彪に贈る「舟を泛べ洪濤を越ゆ」。棹ヲ停ム―船を湖中に静止させること。李白・江上元六林宗に寄す「棹を停めて林巒に依る」。

27

賴 杏坪

松江日霽放輕航、四面雲山与水蒼。樹杪樓抽鷓尾小、波心橋臥蟒身長。此遊帰国為談柄、他日思湖竟夢場。衰折自悲難再会、幾珠老淚迸斜陽。【杪はもと抄に作り、珠はもと株に作る。今正す】

【訓読】松江日霽れて輕航を放つ、四面の雲山水と与に蒼し。樹杪樓は抽く鷓尾小なり、波心橋は臥す蟒身長し。此の遊国に帰れば談柄と為らん、他日湖を思えば竟に夢場。衰折自ら悲しむ再会し難きを、幾珠の老涙か斜陽に迸る。【訳】このところ雨続きだった松江、今日はからりと晴れ渡ったので、宍道湖に小舟を浮かべて波に揺られる。湖のぐるりの雲や山は、水と一緒にくたになって青の世界。こずえの向こうに城がぐんと伸びていて、小さな鷓尾が見える。あちらで波が立っている真ん中には、橋がかかっている、大蛇が長く横たわっているかのよう。このたびの旅行は、故郷の広島に帰ってから、話の種になるほどの貴重な体験だったが、いかんせん、将来この湖を思い起こそうとしても、結局は夢同様になってしまふんだらうねえ。体がもうぼろぼろで、もうこの景色には出会えないだらうことを独り悲しんでいると、夕陽に向かつて、老いた私の涙が、何粒かほとばしり出るのだ。

【注】賴杏坪―一七五六―一八三四。江戸時代中期、後期の儒者。賴亨翁の三男。賴春水（賴山陽の父）、賴春風の弟。賴山陽の叔父に当たる。安芸広島藩士。春水にしたがい、江戸で服部栗齋にまなぶ。天明五年（一七八五）藩の儒官と

なり、藩主淺野齊賢の侍講などをへて三次町奉行などをつとめ、民政につくす。『芸備孝義伝』、『芸藩通志』など藩の編集事業にもあたった。名は惟柔。字は千祺、季立。通称は万四郎。別号に春草、杏翁など。著作に『原古編』、『春草堂詩鈔』など（講談社『日本人名大辞典』による）。『春草堂詩鈔』によれば、詩僧日謙を尋ねに、出雲国を訪れた時の作品がいくつか見いだされるが、この詩は所収されない。しかし、どうも揮毫、草稿の類いが、松江のどこかに残されていたかのようである。出雲の漢詩結社剪淞吟社の機関誌『剪淞詩文』所引の詩も、鈔を抄と間違えており、同一の材料に依っていたことをうかがわせる。軽航―軽舟、小舟。曹植・離友其一「浮済を涉り兮軽航を泛ぶ」。日霽―曇っていたのが、日が出てきて晴れること。駱賓王・秋日陳文林、陸道士を送る、風字を得たり「日は霽る嵯陵の雨」。日々晴れるの意ではあるまい。雲山―雲と山。吳均・柳吳興と同一に烏亭に集い柳舍人を送る「雲山は暎曖を離る」。また、そびえ立つて雲に頂上が入るような山。蔡琰・胡笳十八拍「雲山は万里にして兮歸路遐かなり」。俗世を離れた隱者の住むような山。江淹・蕭被侍中敦勸表「臣は煙洲に遵いて而して岐伯を謝し、雲山を迎えて而して許由を揖する能わず」。これらのニュアンスが「雲山」にこめられていると思われる。樹杪―杪もと抄に誤る。下旬の波心の対としては杪が望ましい。杜甫・章留に陪して後、惠義寺にて嘉州崔都督の州に赴くを餞す「清きは聞く樹杪の磬」。鷗尾―古代の宮殿や寺院の大棟の両端に据える、沓形の飾り瓦。魚の尾をかたどったものといわれ、防火のまじないとした。後世の鬼瓦やしゃちほこはこの変形。顔之推・顔氏家訓・書証「或るひと問いて曰く、『東宮旧事』は何を以てか鷗尾を呼びて祠尾と為す」。『陳書』・高祖紀下「戊辰、重雲殿東鷗尾に紫煙の天に属する有り」。波心―白居易・春湖上に題す「月は波心に点ず一顆の珠」。蟬身―本来は仏教で前世の悪業で、蛇身となったもの。法苑珠林卷二十三―「汝は前世の罪業故に蟬身を受く」。慈悲のために蟬身になる場合もある。大唐西域記卷三「帝釈は悲愍して救済する所を思い、其の形を変えて大いなる蟬身と為る」。ここは仏教臭から離れて、巨大な松江大橋を形容しているに過ぎない。談柄―本来は、古人が清談する時に手に持つ塵払い。如意。庾信・靈法師の葬を送る「玉匣談柄を推き、懸河辯鋒を落す」。転じて、話題の意味。白居易・嚴綬の状を論ず「且つ嚴綬の太原に在るとき之事は、聖聰備さに聞き、天下之人は以て談柄と為す」。夢場―「一場の夢」を転倒した言い方。李中・姑蘇懷古「歌舞一場の夢」。盧延讓・

李郢端公を哭す「一場の春夢越王の城」。場は夢の回数を数える量詞。夢を舞台劇に見立てる。夢の一場面。或いは「夢一場」夢みること一場）をつづめたか。劉後村・五言一首「俄然として夢みること一場」。衰折―衰えること。用例は少ないが、「折」字に、志半ばの挫折の意をこめたか。張耒・元忠學士八兄・「衰折苦ろに催す璧月の空しきを」。再会―再び巡り会うこと。『左伝』昭公十三年「再会して而して盟い、以て昭明を顕らかにす」。幾珠―真珠のたまを、涙にたとえる。李白・古えの辺を思うを学ぶ「珠淚羅衣を湿す」。老淚―孟郊・淡公を送る十二首其七「老淚双つながら滂沱」。迸斜陽―趙嘏・東望「斜陽關に映じ山寺に当たる」。「迸淚」は大仰のようだが、唐詩ではよく使われる。駱賓王・疇昔篇雜言「涙を迸らせて双流に連なる」。杜甫・追いて故高蜀州の人日に寄せ見るるに酬ゆ「涙を迸らせ幽吟せし事は昨の如し」。

28

積しやく 天鱗てんりん【鱗はもと鱗に作る。今正す】

淡青濃緑画難摹、山水如斯天下無。長恨坡公生異域、枉教佳句屬西湖。

【訓読】淡青濃緑は画くも摹し難し、山水斯くの如きは天下に無し。長えに恨む坡公異域に生れ、枉しく佳句をして西湖に属せ教むるを。

【訳】六道湖の、淡い青色や、濃い緑色が織りなす美しさは、絵で表そうと思ってもとても写せない。山水がこんな風なのは、天下でここ以外にはない。返す返すも残念だ。蘇東坡が、異国に生まれて、六道湖を知らないままに、そのすばらしい作品をむなしく西湖にのみ捧げているのは。

【注】淡青濃緑―この詩全体が蘇軾の「湖上に飲む。初め晴れて後に雨ふる二首」を意識する。其一「淡粧濃抹搵べて相宜直し」を用いている。范成大・東門外に熟を刈るを觀る・其「淡青の山色深黄の稻」。李賀・河南府試十二月樂辭並閏月・四月「千山は濃緑にして雲外に生ず」。画難摹―蘇軾・李杞寺丞前篇に和せ見るに次韻す、復た元韻を用いる「鶴は則ち画き易く虎は摹し難し」。天下無―楊維禎・西湖竹枝歌其一「江南の西湖天下に無し」。山水―山や水のある風景。宋書・謝靈運伝「出でて永嘉太守と為る。郡に名山水有り。靈運素より愛好する所なり。出でて

守たるに既に志を得ざれば、遂に意を肆いままにして游邀す」。詩では多く山水画を連想せしめる。杜甫・存没口号其二「鄭公粉絵長夜に随い、曹霸丹青已に白頭。天下何ぞ曾て山水有らん、人間解せず驂駟を重んずるを」。長恨―未
 来永劫怨みを残すこと。揚雄・劇秦美新「懐く所は章らかならず、長く黄泉に恨む」。白居易の「長恨歌」は著名。
 坡公―北宋の文人、蘇軾に対する後人の敬称。蘇軾は東坡居士と号した。朱熹・廖子晦に答う「坡公の海外の意況は深く歎息す可し」。林則徐・中秋月を眺む。作有り「坡公海を渡りて羅浮を誇る」。異域―他郷、外国。楚辭・九章・抽思「好娉佳麗たり兮、畔として独り此の異域に処る」。後漢書・班超伝「猶お當に傅介子、張騫を效ねて功を異域に立つべし」。王維・秘書晁監の日本国に還るを送る「別離方に異域、音信若爲れぞ通せん」。枉教―むなしく・・・させる。・・・しても何の意味もない。李商隱・蜀桐「枉しく紫鳳をして棲む処無から教む」。佳句―詩文の中の精彩ある語句。劉義慶『世說新語』・文学「孫興公『天台賦』を作る。成る。以て范榮期に示す。・・・佳句に至る毎に、輒ち云う、応に是れ我が輩の語なるべし」。杜甫・秋日夔府詠懷古、鄭監、李賓客に寄せ奉る、一百韻「遠遊絶境を凌ぎ、佳句華箋を染む」。

29

左右層巒列画図、直西只見碧波舖。浮空一抹何村樹、烟翠依微認却無。

【訓読】左右層巒画図を列べ、直西只だ見る碧波の舖くを。浮空一抹何れの村樹ならん、烟翠依微として認むるも却つて無し。

【訳】左右の重なる山々は恰も絵を並べたかのよう。真西には、みどり色の波が広がるのが見えるだけ。空中に浮いている、一筆さらつと描いたようなあれは、どこの村の木だろう。もやにおおわれたみどりがぼんやりとそれらしく見えたかと思うと、また消えてしまった。

【注】層巒―李白・古風其三十九、又一本云「浮雲層巒を蔽う」。「巒」は、くねくねと続く山並み。列画図―呉偉業・許堯文の之きて莆陽に官たるを送る「烏石煙巒画図を列ぶ」。直西―杜甫・秋興八首「直北の関山は金鼓振るう」

等を意識するであろう。碧波―エメラルドグリーンの波。李白・江夏にて林公上人の衡岳に遊ぶを送る序「將に五樓之金策を振るい、三湘之碧波に浮かばんと欲す」。許渾・夜永樂に泊る、懐い有り「蓮渚紅を愁えて碧波に蕩る」。鋪―石畳を敷き詰めるように広がること。梅堯臣・次韻して范景仁舍人の雪に對すに和す「浩浩として海雲鋪く」。浮空―李白・賀監の四明に帰るを送る、応制「仙橋空に浮き鳥嶼微かなり」。何村樹―村のまわりに植えられた樹木。村のランドマークとなる。王維・新晴晚望「村樹溪口に連なる」。一抹―筆でさつとはらったような一片。羅虬・比紅児其十七「一抹の濃紅臉に傍いて斜めなり」。陸游・故山を思う「暮に帰れば稚子我を迎えて笑い、遙かに一抹の西村の煙を指す」。煙翠―ぼやとした青みをおびたもや。岑參・峨眉東脚、江に臨んで猿を聴き、二室の旧廬を懐う「峨眉煙翠新たなり」。黃滔・翁公堯員外の寄せ見るに和し奉る「山は南国従り煙翠を添う」。蘇軾・周邠の雁蕩山図に寄すに次韻す其一「眼は明らかなり小閣煙翠に浮かぶ」。ここでは、前句を受けて、もやにおおわれた緑の木々のことと解したい。煙柳と同じ趣き。依微―ぼんやりとして、はつきりしないさま。謝靈運・江妃賦「清管之依微たるを奏す」。劉禹錫・桃源に遊ぶ一百韻「依微として雞犬を聞く」。認却無―認は認識。あの村の木だと認識すること。李白・白胡桃「白玉盤中看るも却って無し」。

30

湖上寒威霽更添、銀濤乱走北風嚴。夜来新下僊峯雪、削出雲間白一尖。

【訓読】湖上の寒威霽れて更に添え、銀濤乱れ走りて北風嚴なり。夜来新たに下る僊峯の雪、削り出だす雲間白一尖。

【訳】六道湖畔の寒さは、晴れば更にその威力を増す。北風が激しく吹き付けるので、銀色の波濤はめちやくちやにあちこちへ走りまわる。昨夜、大山に雪が降ったばかりで、雲の間に白い頂が削り出されたかのように聳えている。

【注】寒威―方干・歲晚事を言う、郷中の親友に寄す「寒威半は龍蛇の窟に入る」。梅堯臣・雪中通判の家に飲みて回る「密雲萬里寒威を増す」。白居易・德宗皇帝挽歌詞四首其四「雲日寒を添えて惨し」。銀濤―銀白色の高波。楊万里・已に湖尾に至り西山を望見す「万頃の銀濤半雲に開く」。乱走―岑參・走馬川行、師を出して西征するを送る「風

に隨いて地に満ち石は乱れ走る」。北風巖——裴侍御雨に対して時に感じて贈らるるに酬ゆ「風は巖にして清江は爽なり」。雲間——雲の間に見える天を指す。劉孝威・鬪鷄篇「願わくは淮南の藥を賜い、一たび雲間に翔け使めん」。

31 松田 松雨

洵美非凡境、蓴鱸也可誇。暮帆争一港、秋水照千家。遠岳装輕雪、疎楓暈断霞。倚欄嗔不尽、只惜夕陽斜。

【訓読】洵に美にして凡境に非ず、蓴鱸も也た誇る可し。暮帆一港を争い、秋水千家を照らす。遠岳輕雪を装い、疎楓断霞を暈む。欄に倚りて嗔じ尽くさず、只だ惜しむ夕陽斜めなるを。

【訳】六道湖、これぞ真の美、人間世界のものではない。ここで採れる蓴菜や鱸のうまさも自慢するに値する。暮れには、帆船がとある港に向かつて、一斉に争うように帰路を急ぎ、秋の気配深い湖面に夕陽が照り返して漁村の家々を染める。遠い峰々には、うつつらと雪が積もり、落葉してまばらに残るかえでの木に、途切れ途切れの夕靄が幾重にもかかっている。湖の側の東屋の欄干に寄りかかりながら、感極まって詩を吟ずるが、この気持ちには吟じ尽くせない。夕陽が斜めになってもうすぐ帰らなければならないのがひたすら残念だ。

【注】松田松雨——一八四五—一九三三。名は敏、字は訥卿、松江の人。雨森精翁・澤野含齋に従学し、詩を苔洲・枕山・松塘・黄石に学び、吉岡星秋と並称さる。大原郡長たり。遷りて濱田・横濱の典獄に転ず。晩年東京に住し、文墨をもつてみずから娛しむ。剪淞吟社名誉社員。著書『禹域遊草』(一九一五)は、一九一三年の中国旅行の詩を集めたもの。『横山耐雪出雲詩綜小伝(訳)』(入谷仙介訳注による) 洵美——詩経・静女「洵に美にして且つ異なれり」。鄭箋「洵は信なり」。凡境——本来は平凡な境地の意であるが、仏教、道教等宗教的見地から、俗界、人間界を指すようになった。寶胤・述書賦上「康帝は則ち幼少より閑慢、廻かに凡境を出づ」。文同・楊山人草堂「入鼎の靈丹は黄なること橘に似、隔牆の凡境は臭なること芻の如し」。蓴鱸——蓴菜と鱸(中国の鱸は、日本のスズキと違ふ)。秋の風物。晋の張翰の故事で有名。『晋書』・張翰伝「張翰秋風の起くるを見て、呉中の蓴羹鱸膾を思う。即ち官を棄てて而して帰る也」。蘇軾・四月十一日初めて荔枝を食らう「一官久しく已に蓴鱸よりも軽し」。可誇——孟郊・濟源寒食七首其七「五色の冬

籠甚だ誇る可し」。暮帆―夕暮れに帆を上げて帰ってくる舟。杜甫・遊子「三峡暮帆の前」。争一港―争は、争って求めること。一対象に殺到すること。杜甫・長江二首其一「衆水涪方に会し、瞿塘一門を争う」。「港」は、もともとは大河や湖につながる小さな河。舟を泊めるのに便であるので、やがて、ひろく「みなと」「波止場」を指すようになった。楊万里・舟中双の鰈魚を買う「小港風に阻まれて烏舫を泊む」。照千家―岑参・郡齋江山を望む「江月千家を照らす」。遠岳―鮑照・代升天行「師に従いて遠嶽に入る」。軽雪―ちらほらと降りつつある雪あるいはうつつすらと降り積もった雪。徐陵・雪を詠む「輕雪風を帯びて斜めなり」。司馬光・正月二十四日夜雪「暈瓦輕雪を浮かぶ」。疎楓―この語の用例は見ないが、疎林、疎葉等は詩語としてよく用いられる。秦觀・韋応物に擬す「秋声疎林より出づ」。断霞―きれぎれの夕焼け雲。梁簡文帝・舞賦「断霞之彩を照らすに似る」。張説・巴丘春作「春山断霞を掛く」。「暈」は重畳、かさねること。劉長卿・洪尊師を尋ねて遇わず「仙帔青霞を暈む」。倚欄―文同・何靖山人の海棠に和す「欄に倚りて終日芳叢に対す」。唸不尽―「唸」は、「吟」の異体字。吟じ終わらないではなく、いろいろな思いをとうていすべて吟じ尽くせないという意。李咸用・李尊師の臨川に帰るを送る「塵外煙霞は吟じ尽くさず」。夕陽斜―銭起・崔十三の東遊するを送る「行人の馬首夕陽斜めなり」。

32

三島雲滙

汀烟破処露孤城、目送帰帆立晚晴。浅碧濃紅春遠近、夕陽三十六湾明。

【訓読】汀烟破るる処孤城を露し、目送す帰帆晚晴に立つを。浅碧濃紅春遠近、夕陽三十六湾明らかなり。

【訳】渚のものが切れるところに松江城がぼつんとあらわれる。私の目は帰る舟の帆を追いつながら、晴れた夕暮の中立ち尽くす。あわいみどりにこいくれない、春の気分は遠く近くあちこちに。夕陽を浴びた沢山の入り江が明るく耀いている。

【注】三島雲滙―三島左次右衛門。一八五二―一九一〇。明治時代の実業家。明治二十二年松江銀行、二十九年山陰貯蓄銀行の設立に参画、のち頭取。松江商業会議所会頭、松江市収入役、県会議員をつとめた。名は榮。号は睡雨（『日

本人名大辞典」。三島睡雨、名は繁、松江の人。詩を釈天麟に学ぶ。松江銀行の頭取たり。明治四十三年没す。年五十九なり。剪淞吟社創立時の社員（『出雲詩綜小伝（訳）』）。汀烟—「烟（煙）」は、もや、かすみのこと。杜甫・寒食「汀煙輕きこと冉冉たり」。破処—「林間に酒を煖め紅葉を焼く」の句で有名な、白居易・王十八の山に帰るを送る、題を仙遊寺に寄す「白雲破る処洞門開く」。孤城—本来、中国では辺境の孤立した城塞や町をいう。ここでは、他の建造物を圧倒して、独り屹立した松江城を言っているであろう。王符・潜夫論・救辺「然れども即墨大夫は孤城を以て独り守り、六年下らず」。王昌齡・従軍行其四「孤城遙かに望む玉門関」。王之渙・涼州詞其一「一片の孤城萬仞の山」。目送—世説新語・巧藝「顧長康画を道う。手五弦を揮うは易く、目帰鴻を送るは難し」が出典。錢起・仲春王補闕の城東山池に宴す「目帰鴻を送り笑いて復た歌う」。帰帆—陳子昂・白帝城懷古「帰帆霧中を出づ」。立晚晴—朱熹・墨莊五詠・君子亭「衣を披き晚風に立つ」。杜甫・復陰「昨日晩に晴るるも今日黒し」。淺碧濃紅—本来は淺深または濃淡で対にすべきところであるが、わざと崩したのであろう。楊基・紅白桃花 採桑子「淺碧深紅は是誰家か分染する」。孟東野・濟源春「深紅は草木を縷し、淺碧は沂泗を珩す」。羅虬・比紅児「一抹の濃紅臉に傍いて斜めなり」。楊万里・張功父南湖の海棠を觀る、藜に杖つきて筆を走らす其二「濃紅密密淡疎疎」。三十六湾—「三十六」は、実数ではなく多くの数を表すときによく使う。班固・西都賦「離宮の別館、三十六所」。范成大・連日風作る、洞庭渡る可からず。赤沙湖に出づ「三十六湾漲痕生ず」。ここは杜牧の、月「三十六宮秋夜深し」、揚州韓綽判官に寄す「二十四橋明月夜」の如く、数字を印象的に用いる作風をまねたのであろう。幕末から明治初めの漢詩人、森春濤の号が「三十六湾髻史」。居住した岐阜の長良川が曲がりくねっていることにちなんで名付けたらしい。明治六年「岐阜雜詩」に「盈盈たり三十六湾の水」とある。「湾」は、古代中国では河川のへこんだところに使うが、ここでは宍道湖の入江、したがって港を指すであろう。

33
漕つれし 宍道湖の海
早舟は ある、日なみも 時をたかへず
島 重養

【訳】 並んで漕いでくる宍道湖の早舟は、どんな荒れた天候でも、遅れずにやってくる（それなのにあなたと来たら、約束を破ってばかり）。

【注】 漕つれし―石清水社歌合「松の戸に明暮ぞ見る漕ぎ連れて北山本を過ぐる河船。「つれる」というところに、男女の恋愛の意を潜めたか。早舟―はやふね、またははやぶね。船足の速い小舟。大江朝綱「大島に水運びし早舟の早くも人にあひみてしがな」。江戸時代の早船は、軍船や廻船等、多くの入夫が漕ぐ比較的大型の高速船を指す名称になったようであるが、はたして時を遅えず運行するようなものであったろうか。ただ、明治初期、海運の発達により、大きな定期蒸気船が、宍道湖や大橋川を出入りしたようであるから、これもそのような新時代の時間に正確な大型船を思い浮かべるべきかもしれない。ある、―伊勢「風吹けば生田の浦の幾たびか荒るる心在人に見すらむ」。正徹「荒るる日の湊入りくる友舟は数限りなき雪の苦葺き」。日なみ―日並みは、本来は毎日の意。文治六年女御入内和歌「急ぎ立つ日並みの御狩雪深し交野の小野の冬の曙」。俗に、日の吉凶、天候のよしあしの意味となった。ここはおそらく俗っぽい措辞を指摘したのである。時をたかへす―俊成「秋毎に時を違へず来る雁はよよにつかふる心あるらし」。他の物が、時刻や約束を守るのにと詠んで、恋人が逢瀬にやっつてこない不実を暗になじるのは、和歌の常套。

34

松井言正

いさ清き きよ 宍道の湖に しんぢう てる月 つき は きみがちとせ 君か千年の さかひなり 境 さかい けり

【訳】 透き通るような宍道湖に万古不変に照る月、この風景こそ、清らかな気持ちで千年も万年も生き続けるあなたの境地を象徴するもののだと思います（この風景のような高雅な境地で長生きされますように）。

【注】 いさ清き―潔し。「いさ（甚だの意か）」＋「清し」と分解できるので、このように表記したか。汚れない。清浄だ。本来は、人格の高潔に対してではなくて、景色の清らかさに対して言う。行尊「いさぎよき空の景色をたのむかな我惑はすな秋の夜の月」。梁塵秘抄「瑠璃の浄土はいさぎよし」。ちとせ―古今集「渡つ海の浜の真砂を数えつつ君がちとせの有り数にせむ」。長寿を祈り、寿ぐ際にしばしば使われる歌語。君―本書刊行と同時期の明治十三年（一

八八〇)に、後の国歌となる「君が代」が作曲されたのでもわかるように、当時すでに「君」と言えば、天皇を連想するようになったであろう。ただ、読み手の受けとめ方はともかく、作り手は、特定の相手(恋人、目上の人)に対して、長寿を祈る気持ちをこの歌にこめたのだと訳者は考える。本書全体に、天皇崇拜の趣が乏しいからである。或いは、鳥重養の作を受けて、万古不変の恋情を六道湖と月とに託したのかもしれない。ただし、和歌では、月は満ち欠けする、当てにならないものとして詠まれることが多いようであるが。「千年の境」は「千年の坂」を意識するか。千年の歲月を過すことを坂を越えることにたとえていった語。古今集・賀のうた「ちはやぶる神やきりけむつくからに千年の坂も越えぬべらなり」。境——(境界に囲まれた)場所。家隆「ながむれば越え来し峰も埋もれて雲ぞ都の境なりける」。さらにはすぐれた境地、世界。徒然草「二つのわざ、やうやう境に入りければ」。

35

佐比売山さひめやま 大神山おほがみやま 遠しらくとほ たかねうつせる 意宇の湖おうみづうみ
長谷川龍衛はせがわらえ

【訳】三瓶山、それから大山も、遠く白く、その壮大な高峰を水面に映している、この六道湖よ。

【注】佐比売山——石見国三瓶山の古名。『出雲国風土記』の国引き神話に「かくて堅め立てし杭(かし)は、石見の国と出雲のとの境なる、名は佐比売山なり」とあらわれる。大田市に佐比売山神社がある。大神山——伯耆国大山。国引き神話では「火神岳(ほがみだけ)」としてあらわれる。後に大神山とも呼ばれるようになった。『延喜式』に大神山神社あり(米子市に現存)。「おほかみやま」と清んで読ませているのかもしれない。遠しらく——大きくてりっぱである。雄大である。山部赤人「明日香(あすか)の古き京師(みやこ)は山高み河とほしろし」。「とほしろし」の原義については、「大」(賀茂真淵)、「は」つきりしている(本居宣長)等の説が有力で、作者も当然知っていたであろうが、ここでは「遠く白い」という気持ちも兼ねて、積雪で白く見える山を描写しているか。橋本進吉「とほしろし考」参照。たかね——山部赤人「田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける」。うつせる——経信「誰とかや姿映せる池水は我が面影に去らじとを知れ」。

*佐比売を女神、大神を男神と考えて、恋の気分を漂わせているのかもしれない。

36

雲ぬける 月の勢ひや 猪道湖

松江 梅圭

【訳】宍道湖上で、覆われていた雲を突き抜けてあらわれる月の勢いがすごい。その名も猪の通る道という意味の「宍道湖」にふさわしい、猛烈な速さだ。

【注】梅圭―姓は曲川と同じ山内らしいが、不詳。風流新誌第一号「寒さにも扇ひろげて御万歳。同第二号「喰ひもせて愛せらるゝや小殿原」。雲ぬける―「ぬける」は口語文法による。勢ひ―字数から言って、「いきほひ」ではなく「きはひ」。強い勢い。氣勢。もとは「きお（競）ふ」の連用形の名詞化。優劣、強弱、先後などを争うこと。はりあい。源氏物語・若菜上「かかるきはひには、慕ふやうに、心あわただし」。猪道湖―宍道湖。わざわざ「猪」の字で表記したからには、「しんぢ」と読むのではなく、「しぢ」と読んだのであろう。『出雲国風土記』では、「宍道郷」の訓は、「ししちのさと」になっている。「ししち」の由来が、猪が通った道だからだという語源説も『出雲国風土記』に載っている。本書の「猪石」、「犬石」の項に詳しい。月が天空を渡っていく速さを、猪突猛進と関連づけたのである。天空の雲や月が、宍道湖の水面にも映っているさまを詠んでいるのかもしれない。猪とは違うが、歌舞伎の演目で、雄壮な獅子舞である「勢獅子（きおいじし）」も意識するか。そうならば、勢獅子のような月という意を、語順を変えて潜ませた面白さを狙ったのかもしれない。季語 月（秋）。

○御井

出雲郡、下直江村、御井神社境外二三井アリ。一八方四尺、一八方五尺、一八方三尺ニシテ。共ニ井幹ナシ。唯藩籬ノ之レヲ繞ルノミ。神代、大己貫命、稻葉八上姫ヲ娶リ、結ノ里ニ於テ木俣神ヲ産ム。是レハ則チ神ノ産湯井ナリ。実ニ靈水トイフヘシ。

【訳】出雲郡の下直江村の御井神社の周囲に三つの井戸がある。一つは四尺（一・二メートル）四方、一つは五尺（一・五メートル）四方、一つは三尺（〇・九メートル）四方で、どれも井桁は付いておらず、ただ生け垣だけがまわりを囲っている。神話時代、大己貴命（大國主命）が稲葉八上姫と結婚し、八上姫はこの近くの結の里で木俣神を出産した。これらの井戸こそが、木俣神の産湯に使った井戸である。まさに、くすしき水と称するに値する。

【注】御井—『古事記』「故其の八上比売は率て來つると雖ども、其の嫡妻、須世理毘売を畏みて、其の生みし子を木の俣に刺し狭みて返りき。故、其の子の名を木俣の神と云い、またの名を御井の神と謂う」。下直江村—今の出雲市斐川町直江。御井神社—『出雲国風土記』に名あり。式内社。『雲陽誌』（元祿頃）出雲郡・上（下の間違いか）直江・御井社「大己貴命の御子木俣（きまた）神をまつる。延喜式、風土記に御井（みい）社と書せり。旧記に大己貴命稲葉八上姫を娶て結之里にて此の神を誕生したまふ。産湯の井あり。故に御井と書たり。本社は田間の小山にあり。祭礼九月九日なり」。三井—現在、「生井（いくい）」、「福井（さくい）」、「綱長井（つながい）」が、神社の周囲に散在し、整備、修復されている。「御井（みい）」に合わせて「三井（みい）」があるのか、それともその逆なのか、あるいは関係はないのか、不明。方四尺以下のそれぞれが、どの井戸に当たるかも、蓋に蔽われてよくわからない。井幹—「井韓」とも書く。井桁のこと。張衡・西京賦「井幹置なりて而して百層なり」。藩籬—竹で編んだかきねのこと。陸機・辨亡論「城池に藩籬之固き無し」。神代—または、「かみよ」。漢文訓読調の文章なので、音読みをした。人の世に先立つ時代。神武天皇以前。結の里—現在も、直江町、御井神社の付近に「結」の地名あり。先に引用した『雲陽誌』の記述参考。木俣神—きまた、きのまた等の読みもあるが、和歌で用いるときは「このまたのかみ」と読むのが、聞いて快いと思う。産湯井—「うぶゆのゐ」と読んでいるのかもしれない。漢語ではなく、和語。日本では、各地の名水が、歴史上の著名人物の産湯に比定され、名所になることは枚挙に暇がない。『日本書紀』の反正（瑞齒別）天皇の条でも「天皇初め淡路の宮に生まる。生れながらにして齒は一骨の如し。容姿美麗なり。是に井有り。瑞井と曰う。則ち之を汲みて太子を洗う。時に多遅の花、井中に有り。因りて太子の名と為す也」と、井戸を産湯につかったことが書いてある。淡路島産宮神社には、今でもこの時の井戸が残っているという。霊水—神仏の加護を受けて、病

氣治癒、安産などに靈験あらたかな水。蘇軾・再び徑山に遊ぶ「靈水先に除く眼界の花たるを」。

37

三島雲滙

神跡猶伝御井名、苔甃緑湿水盈々。荒垣今日無人補、立聴青蛙喚雨声。

【訓読】神跡猶お伝う御井の名、苔甃緑湿い水盈々たり。荒垣今日人の補う無し、立ちながら聴く青蛙雨を喚ぶ声。

【訳】木俣神の降臨された名残として、「御井」神社の名前が今なおのこっている。苔の生えた井戸の敷石は、緑色に濡れて、水を満々とたたえている。現在、荒れた塀は誰も修理をせぬままにほったらかしにされている。独り私は立ち戻り、蛙たちが雨の降るのを誘うかのように、鳴き声をあげるのを聞くのである。

【注】神跡―神の足跡。神の事蹟が残したもの。水経注・肥水「東北して神跡亭を逕す」。大唐西域記・八国「威靈潛被し、神跡照明す」。御井―漢語としては、皇帝の使用する宮中の井戸という意味になる。蘇晋・張説の巡辺するを送る「池は分かつ御井の蓮」。苔甃―甃はいしだたみではなく、井戸の敷き瓦のこと。権徳輿・映師の本寺に帰るを送る「苔甃桐華落つ」。ただし、甃は仄声で、平仄が合わない。愁（平声）と混乱したか。あるいは同義の磚（平声）のあやまりか。緑湿―温庭筠・春洲曲「緑湿い紅鮮やかにして水容は媚ぶ」。水盈々―陸龜蒙・聖姑廟「渺渺たる洞庭水盈溢たり」。白居易・除官して闕に赴く、偶ま微之に贈る「一水盈盈として道通ぜず」。荒垣―垣は本来土塀の意味だが、ここは由緒にある「藩籬（かきね）」のことであろう。邵雍・天津事に感ず「荒垣壞堵人の耕す処、半は是れ前朝の卿相の家」。無人補―補は、補修。もとの完全な形に戻すこと。呉偉業・文園公に贈る「曲終わり哀怨人の補う無し」。立聴―立ち尽くしてぼうつとして聴くこと。賈島・蟬を聞く、感懐「覚えず立ちて聴く無限の時」。青蛙―みどりいろの蛙。アマガエル、トノサマガエル。韓愈・盆池「一夜青蛙鳴いて曉に到る」。喚雨―中国の俗諺では、鳩が鳴けば雨が降る。陸璣・毛詩草木鳥獸虫魚疏・宛彼鳴鳩「鳩鳩は、灰色、繡項無し。陰ならば則ち其の匹を屏逐し、晴ならば則ち之を呼ぶ。語に曰く、天将に雨降らんとするや、鳩婦を逐う」。詩語では、「鳩喚雨」等の形で用いる。歐陽修・山齋戲書絕句二首其一「麦壠已に深くして鳩雨を喚ぶ」。蘇軾・子由の子瞻將に終南太平宮の溪堂に

如きて読書せんとするを聞く、に和す「中間旱暵に懼り、雨を喚ぶ鳩を学ばんことを欲す」。中国の詩では、蛙と雨が連結するものは少ないようである。

38

島しま 重養しげかひ

木俣このまたの 神かみの 産湯うぶゆの むかしさへ くみとる御井みゐいの 松まつの下した 水みづ

【訳】木俣神が漬かった産湯を古代もここからくみ取っていたという、眼前の御井の井戸。水がわきこぼれて、松の木の下を人知れず流れている（この井戸を見ていると、木俣神を棄てて帰って行った、八上媛のあれこれの心情が忍ばれることだ）。

【注】むかしさへ―「さへ」は添加の意、までも。現在も水を汲んでいるが、上代も、という気持ちか。民部卿家歌合「松の戸に独りながめし昔さへ思ひしらるる有明の月」。寂蓮「知らざりし昔さへこそ恋ひしけたけちの浦の月をながめて」。くみとる―「くむ」は、歌語として用いるが、「くみとる」の形はまれ。恐らく、『日本書紀』山彦・海彦神話のくだり（一本）、「時に豊玉姫の侍者有りて、玉鏡を持って当に井の水を汲まむとするに人影の水底に在るをみて之を酌み取るも得ず」の「酌み取る」等を意識して、古代風の言葉遣いをしたのだと思う（俗語として用いているのではあるまい）。「くむ」には人の心を斟酌するの意もある。したがって、ここでは井戸の水を「くみとる」ことと、「むかし」の事情、神代のありさまをあれこれ「くみとる」こととを、掛けていると訳者は解釈する。さらには、八上媛と大国主命の恋愛とその破局とに対する同情が、この歌の背後にあると思うのである。古今集「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞくむ」。松―「待つ」との掛詞。八上媛の、心ならずも大国主命と別れざるを得なかったが、なお大国主命との逢瀬を「待つ」気持ち。また、作者自身が八上媛の心情を、時代を隔てて体感するのを「待」ちこがれる気持ちも兼ねるかもしれない。下水―物の陰や下を流れる水。新古今「岩間とぢし氷も今朝はとけそめて苔の下水道もとむらむ」。和歌では、多く心の中のひそかな思いを比喻する語として用いる。後拾遺「木葉散る山の下水うづもれて流れもやらぬものをこそおもへ」（この歌、恋に分類される）。千五百番歌合「さりととも頼む心の深ければな

ほこの暮れも松の下水」も、このこと同じく、「松」と「待つ」が掛詞であり、「下水」が秘めた恋情を象徴している。

39

木俣こまたに かくれて蝉せみの はふかけも 島多豆夫しまたずお
うつりて清きよし 御井みいの真清水ましみづ

【訳】木の枝の間に隠れて、蝉が這っている。その姿さえもはつきり水面に映って、ますます清澄透明に感じられる、この御井の井戸の清らかこの上ない水は。

【注】木俣―昔、木俣神が棄て置かれたかもしれぬ、この木のまたに、ということであろうが、作歌のきつかけにすぎず、神話に対する思いは乏しいであろう。かくれて―順徳院「人知れぬ身を空蟬の木隠れて忍べば袖に余る露かな」は、この歌の趣向に近いであろうが、順徳院のは「空蟬（蟬の抜け殻）」であり、これは眼前の描写に興味があつて、特に蟬に何かの感情を託しているのではないと思う。蟬といえは、空蟬、蟬の衣、蟬の声等が伝統文学の材料となるが、この歌は、蟬が這うところに着目して、常套を脱した新味をだそうとしたのではないか。はふ―這う。歌語としては余り用いられない。まして、蟬が這うは、新奇な詠み方なのである。うつりて―親隆「鏡をば差し置くことや無からまし恋しき人の影うつりせば」等、何かの影が映ることは、恋と関連してよく詠まれるが、ここでは裏の意味はあるまい。掛詞等も考えなくてよいと思う。御井の真清水―おそらく、『万葉集』・藤原宮御井歌・・・水許曾婆、常尔有米、御井之清水（みづこそは、つねにあらめ、みるのましみづ。賀茂真淵の『万葉考』訓による。清水は「きよみづ」等の異訓あり）をそのまま用いたのである。真清水は歌語としてしばしば用いられ、この歌と雰囲気相通ずるものも多い。隆源「真清水の見れば涼しく覚えつつ結ばでただにくらしつるかな」。花園左大臣家小大進「真清水に扇も夏も忘られてやや肌寒し蟬の羽衣」。玉葉集「影映す庭の真清水結ぶ手の滴も月も袖に涼しき」。俊成「浅ましや袖ぬれてこそ結びしかまだ影見せぬ宿の真清水」。

*鳥重養の作が、神話を題材にし、あからさまな恋の思わせぶりであるのに対して、自分は、眼前の描写と、井戸の清水自体を詠むことに徹したのである。木俣」と「御井」は、神話世界を枠組みとして使っただけであり、往事を懐

古する風は乏しい。無理に恋の気持ちを深読みする必要もなからう。

○陰陽石

秋鹿郡、古浦ニアリ。偕二天然ノ巨岩ニシテ、陽石ノ高サ一丈、海上ニアリ、陰石ノ高サ二丈、海岸ニアリテ、相對峙ス。其距ル事、凡ソ十間。北風岸ヲ打テ、水波鳴ル。陽石ノ下部ニ、海苔、貝殻ヲ纏ヒ、陰石ノ上部ニ、蘆葦、滴水ヲ帶フ。形状恰モ玉莖玉門ノ如シ。社アリテ伊弉諾、伊弉冊ノ二尊ヲ祭ル。

【訳】陰陽石は、秋鹿郡古浦にある。二つとも自然に出来た大岩であり、陽石の高さは一丈(三メートル)で海中に聳え、陰石の高さは二丈(六・一メートル)で海岸に立ち、お互いに向き合っている。両者の距離はおよそ十間(二八・二メートル)。北風が海岸にぶち当たって、波の音が轟く。陽石の下部には、海苔が広がり、貝殻をその上に沢山つけている。陰石の上部には、アシが生えていて、わき水の滴にしとどに濡れている。形状は、まるで男性器、女性器のようだ。神社があつて、イザナギ・イザナミの二神を祭っている。

【注】陰陽石―陽石は現在古浦海水浴場の西約二キロメートルに位置する男島。陰石はその南に位置する海岸上の巨石。『雲陽誌』秋鹿郡古浦の条に「男島明神 海中の西の島にあり。伊弉諾命をまつる。社二尺四方、祭三月朔日」とある。陸上からは、近づきにくく、挿絵のように、もっぱら海上から見物したらしい。明治期は、日本海の海上交通が盛んであったから、古浦や恵曇港を訪れる際の目印であったのだろう。宮武外骨『猥褻風俗史』(雅俗文庫 明治四十四年)には、『出雲名勝摘要』の書名とこの由緒と次の鳥重養の和歌が引用されており、全国的にも知る人ぞ知る景物だったと思われる。日本各地に陰陽石の類いは多い。ちなみに中国にも陰陽石の名はある。(『水経注』夷水。形状不明)。対峙―水経注・資水「県の左右二岡対峙す」。海苔貝殻を纏ひ―下句と対の関係にあるのでわざと音読みをした。海苔は『本草』にある。蘆葦滴水を帯ぶ―古浦の海岸には、岩山が迫っていて、わき水がしたたるところが多い。或いは海水のしぶきも含まれるか。蘆葦は、アシであるが、海岸の岩に生え得るものかどうか、不審。アシ状の細長い莖をもった植物のことか。劉禹錫・晩に牛渚に泊まる「蘆葦晚風起つ」。杜牧・沈学士張歌人に贈る「光明にして滴水

円かなり」。岸を打つ―杜甫・江南鄭典設を懐う有り「乱波分披として已に岸を打つ」。玉莖、玉門―共に漢語。日本でも、十世紀の『和名抄』や十一世紀の『医心方』に見える由緒正しい語。伊弉諾、伊弉冊―先に引用した『雲陽誌』（元禄頃）では、伊弉諾の神名のみが記されていたが、陰陽石と称している以上、この時期には男女両神を祭っていたか。「伊弉冊」の「冊」は、本来「冉」に作るべきだが、日本では、古来、両字は混用されている。

40

島しま重しげ養かひ

おのづから か、る形かたちも なりくなりて なりあまる石いし なりあはぬ石いわ

【訳】自然とこんな形が出来上がっていったのだなあ。「なりなりてなりあまる」陽石と「なりなりてなりあわぬ」陰石とは。

【注】おのづから―古事記「是の後に生れし五柱の男子は物実我が物に因りて成れり。故、自ら吾が子ぞ」。固い言葉なので、歌語としては用いられないようである。上古風を粧っているのだろう。かかる―「かかり」は、「斯くあり」が縮まったもの。万葉調の固い言葉。大伴旅人「事も無く生き来しものを老いなみにかかる恋にもわれはあへるかも」。まさか、こんな事があるうとは、という驚きの気持ち背後にある言葉。かたち―歌語では、容貌の意ではしばしば使われるが、ここは形状や姿。日本書紀「時に、天地の中に一物生れり。状（かたち）葦牙の如し」。これも上古風。なりなりて・・・―いうまでもなく、古事記の所謂国土生成の段の、イザナギとイザナミとの間で行われたたとのまぐわいの前の会話をほぼそのまま用いている。「是に其の妹、伊邪那美の命に問いて曰く「汝が身は如何にか成りつる」。答えて「吾が身は成り成りて成り合あわざる処一処在り」と白しき。爾くして伊邪那岐の命、「我が身は成り成りて成り餘れる処一処在り。故、此の吾が身の成り餘れる処を以ちて、汝が身の成り合あわざる処に刺し塞ふぎて國土を生み成さんとおもう。生むこと奈何」。この、「わがみはなりなりてなりあわざるところひとところあり」と「わがみはなりなりてなりあまれるところひとところあり」とをうまく組み込んだ。第三句で、「形ちもなる」と「なりなりてなりあまる（なりあはぬ）」の両義を接続した修辭。自然の造化の不思議に対する感動と神話世界との融合を目指したのである

う。「おのづから」にこだわれば、神の力に関係の無い生成の妙を詠うようにも見えるが、日本神話のイザナミ、イザナギ以前の神も、自然に成立した「独立神」である以上、やはり神話的世界の一部として、陰陽石をとらえていると考へたい。

41 浪にそふなみの 陰陽石いんようせきや 初日はつひかげ 松江まつえ 曲川まがたに

【訳】浪のそばで、夫婦が寄り添うようにしている陰陽石。そこに、今年初めての日の光が当たる。

【注】そふ―直接には浪に寄り添うことであるが、陽石、陰石二つの石が仲良く寄り添っていることも掛けているであろう。初日かげ―初日影。かげは光、日光のこと。したがって初日と同意。本来は「ひかげ（日陰）」の意ではない。新年の季語。すでに新暦も定着した時期であるが、伝統的な俳人としては旧暦によったであろうか。旧作であるかもしれない。利牛「初日影我莖立とつまればや」。任行「濡いろや大かはらけの初日影」。

*初日の光によって、陽石は陽にふさわしく明るく、逆に陰石は日陰になって暗く見えるコントラストにおもしろさを感じているのかもしれない。陰陽五行説や日本神話に見られる万物創成の伝説を背景に、新しい年のはじまりの気運をことほいでいる。季語 初日かげ（新年）。

本訳注は、

島根大学法文学部山陰研究センター 山陰研究プロジェクト

1303 山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト（代表 野本 瑠美 実施年度…二〇一三―二〇一五年度）による成果の一部である。